

【ポスター発表】

カフェ型コミュニティによる慢性疾患患者等のエンパワメント

○ 日本女子大学 大部 令絵 (008907)

キーワード：カフェ型コミュニティ 慢性疾患患者 エンパワメント

1. 研究目的

近年、何らかの慢性疾患または障害のある人々(以下、患者)を含む市民が対話(dialogue)によって健康に関して学ぶ場作りが広がりつつある。この場においては、参加者の背景や肩書きの内容に関わらず対等な関係で行われる対話が重視されており、そうした対話の持ち方は“カフェ型”と呼ばれる。カフェ型コミュニティに関するこれまでの研究では、患者・市民が変容的学習をしていること、また、患者は健康関連のテーマの対話や、対話することそのものを参加動機としていることが明らかとなっている。これらの知見により、カフェ型コミュニティにおける健康増進活動は、その効果から健康増進法において方向性として定められている“個人が主体的に行う健康増進の取組”の支援において重要なものと位置づけることができる。しかし、カフェ型コミュニティに参加するメリット・デメリットを含め、患者の変容的学習を継続的なものとするうえで重要な継続参加を促進する要因および阻害する要因、また、参加後の生活上の変化については明らかとなっていない。

そこで本研究では、カフェ型コミュニティ参加者である患者を対象に、継続参加要因および参加阻害要因、またその後の生活の変化について、インタビューにより明らかにすることを目的とした。本研究の遂行により、カフェ型コミュニティにおけるエンパワメントの効果と、患者の主体的な健康増進に対する専門職の支援方法を検討することを目指した。

2. 研究の視点および方法

カフェ型コミュニティに複数回参加経験のある5名の患者に対し、2015年6月～8月にインタビューを実施した。インタビューは半構造化面接の形式で実施し、回答者の属性(年代・性別・疾患)に加え、①カフェ型コミュニティの参加歴、②初回参加時のきっかけおよび感想、③複数回参加している理由、④回答者にとってのカフェ型コミュニティ参加のメリットおよびデメリット、⑤カフェ型コミュニティ参加による回答者の生活の変化、⑥カフェ型コミュニティの改善点、⑦その他、カフェ型コミュニティについての意見、について尋ねた。インタビューは、質問内容ごとに記入欄を設けた記録用紙に研究実施者が記載する方法で記録された。得られた回答は、文章の意味内容のまとまりごとにコード化されたうえで、筆者を含む保健医療福祉領域の研究者3名により、質問項目ごとに分類、整理された。

3. 倫理的配慮

本研究においては、日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づいた配慮がなされた。また、埼玉県立大学倫理審査委員会の承認を得て研究が実施された（受付番号 27031）。

4. 研究結果

回答者は、男性 2 名、女性 3 名であり、年齢は 30～40 歳代であった。回答者の疾患は、がん、全身性エリテマトーデス、一型糖尿病、二分脊椎、ファブリー病であった。

①②の結果から、回答者は 2011 年以降にカフェ型コミュニティへの参加経験を複数回有していた。初回参加時の感想から、患者会と比較したうえでの学びの価値や、異なる疾患の患者同士の交流機会およびコミュニケーションに対する肯定的な感想がみられた。

①②③、④のメリット、および⑦の結果から、カフェ型コミュニティへの継続参加要因として、対話そのものの楽しさ、病気をケアしながら生活するための知識の獲得、他の疾患を有する対象者との交流による多様性の理解が挙げられた。他方、④のデメリット、および⑥⑦を分類した結果、参加阻害要因として、開催予定と回答者の予定との不一致、対話場面における他の参加者の言葉によるダメージ、参加費の負担が挙げられた。また、⑤の整理から、カフェ型コミュニティへの参加による生活の変化として、服薬への意識の変化、およびコミュニケーション力の向上が挙げられた。

5. 考察

カフェ型コミュニティへの参加について、疾患の異なる患者同士の交流に対する肯定的な意見が得られた。このことから、疾患名による集い以外に、対話テーマとして掲げられる生活場面と疾患との関連による集いの場の重要性が示唆された。また、知識の獲得や服薬への意識の変化、コミュニケーション力の評価および多様性の理解といった効果を身近な場で得られるよう、地域に根ざしたカフェ型コミュニティの場を作ることが、患者の生活の質の向上に寄与すると考えられた。さらに、カフェ型コミュニティにおけるファシリテーションに関する課題から、ファシリテーション能力を有する専門職の介入が必要であることが示された。

以上から、患者の主体的な生活課題解決を支援する専門職が対話の場をつくりエンパワメントを行うにあたっては、カフェ型コミュニティの継続参加による効果をふまえ、地域の状況に合わせた場作り、ファシリテーションの実施が重要である。同時に、多面的要素を包含する課題への対話のサポートにあたっては、複数の専門職が連携して場づくりを行うことで、参加者にとってより充実した対話の場となるであろう。

なお、本研究の回答者は少数であり、参加による継続的な生活の変化は、本研究で得られた知見以上に存在する可能性がある。また、生活の質の変化をさらに長期的な視点でとらえ、患者のための対話の場の価値を検討していくことが必要であると考えられた。